博士論文要旨

家庭の食を介した親子間相互作用の機能と機序

Function and mechanism of interaction between parent and child through family meal

伊東　暁子（Akiko Ito）　　指導：鈴木　晶夫

本論文は，子どもの食態度とその背景としての家庭・親子関係に注目し，これらの関係の分析の成果をまとめたものである。全５章から構成され，４つの研究が含まれている（Figure１参照）。

【先行研究（第１章）】

食に関連する先行研究を，「健康」，「発達」，「社会」，「文化」の４側面から概観し，食がいかに心身の健康に深く関わっているのか，また発達段階ごとに食態度が変化する様子，食態度の獲得に家庭や文化が及ぼす影響について述べた。

【問題提起（第２章）】

先行研究から導き出される食研究における課題を三点挙げた。すなわち，健常群を対象とした食行動の法則性の検討の必要性，家族や周囲の人との関係性という立場からの研究の必要性，家庭における食事の意義に関する実証的な研究の必要性である。これら三点を踏まえた上で，本研究では子どもが最初に食事を共にする家族という集団に焦点をあて，家庭における食事の意義について検討することを目的とした。

【青年期学生の食態度と親子関係の関連（第３章）】

青年期学生を対象とした調査研究から食態度と親子関係の関連について検討した。

まず研究Ⅰでは，大学生の食態度を規定している要因を探索的に検討するために調査を行なった。より具体的には，個人属性，過去および現在の食態度，親子関係に注目し，それぞれの変数間の相関関係および因果関係を検討し，家庭での食事経験が現在の親子関係に影響をおよぼしていることを明らかにした。すなわち，家族で共に食事をとる楽しさや食事場面での躾の経験からは父母への同一化感情に正の影響があり，弁当に関するネガティブな思い出からは母への同一化感情に負の影響があるという結果であった。

研究Ⅱでは，食態度を測定する尺度の作成を試みた。研究Ⅰでは，食態度を把握するにあたり，適当な尺度がなかったため，先行研究を参考に項目を収集したものからなる調査を実施したが，論を進めるにあたり，食態度を測定する尺度の必要性と有効性を確信したため，研究Ⅱでは尺度の精査も目的とした。さらに研究Ⅱでは新たなサンプルを用いて，研究Ⅰで得られた結果をより詳細にわたって比較・検討した。研究Ⅰと大きく異なる点としては，過去の家庭での食経験の一つとして弁当に注目し，調査対象者に対して詳しく想起・回答を求めたことが挙げられる。その結果，子どもは与えられた食事に関して評価を行なっており，評価が食行動に影響すること，またそれらの食経験が親子関係に影響を及ぼしていることが示された。すなわち，過去の食経験の時期別に親子関係へ及ぼす影響の差異を検討したところ，時間の経過に関わらず，高校時代の経験よりも幼少期の経験が大きく影響することが明らかとなった（Figure２参照）。

【幼児期の弁当を介した親子間相互作用（第４章）】

前章での弁当に関する調査の結果を受け，家庭の食の一形態としての弁当に注目し，幼少期の食を介した親子の相互作用について，親側および子ども側からの検討を行なった。

研究Ⅲでは，親側にインタビューをすることで弁当作りの実態調査を行ない，親の立場から弁当（食事）が果たす役割について検討した。具体的には，親が弁当をどのようにとらえ，作成しているのかについて調査した。その結果，母親は弁当作りを少なからず負担に思っていること，しかしながら，子どもから出される要望などを参考にしながら子どもの体調や食欲にあわせて弁当を作っていることを示す結果となった。また，母親が自分の思い描く弁当を作ることができた場合，あるいは作る見通しがたった場合や，子どもからの弁当に対する肯定的な態度を感じる場合など，弁当の作り手である母親の自己効力感が得られる場合に，母親は弁当作成にやりがいや楽しみを感じることが示された。

研究Ⅳでは，幼稚園で収集した観察データおよびインタビューデータをもとにして，弁当（食事）が果たす役割について主に子どもの立場から検討した。その結果，子どもは全般的には食事作りに対して，依存的態度を示していた。しかしながら，与えられた食事を無条件で受容しているわけではなく，内容（好き嫌い，新奇性，気分との合致）・量・弁当の作り手の労力などを含めて評価を行なっており，場合によっては弁当内容の変更が求められることが明らかとなった。この弁当に対する評価は，弁当に嫌いな食べ物

が含まれていることが必ず否定的な感情生起につながるというような単純なものではない。また，この評価には個人差があるということも明らかとなった。さらにインタビューからは，子どもにとって食事場面は，「時間内に食べる，食具を用いて食べる，静かに食べる」など，滞りなく食べるための多くの課題が存在しており，周囲の大人の要求に応え，これらの課題を達成していくことで，子どもたちは徐々に自己効力感を獲得していく可能性が示唆された。

【総合考察（第５章)】

以上の結果をもとに総合的な考察を行なった。まず，家庭の食事場面の相互作用の特徴として，生理的欲求の充足の場であると同時に，親子間双方向の情緒的な交流のなされ得る場であることを述べた。また，幼少期の子どもの自己認知と親子関係および食行動の発達について，家庭の食事との関連からプロセスモデルを示した（Figure３参照)。すなわち，子どもにとって家庭の食事とは，食事を食べる場面における親子間の直接的なやり取り（会話，食物をよそう・よそわれる，食べる・食べさせる等）だけではなく，用意された食事の内容や準備の様子などを通して，子どもが親の意図，感情，動機を推測し，自分が親にどのように扱われているかを認識する手段の一つであると位置づけた。特に幼少期は，食物を滞りなく口に運ぶという面では決してスムーズではなく，親の気持ちを汲み取るというわけにはいかないことも多いが，普段何度となく繰り返される食生活の中で，親の自分に対する態度を感じ取り，基本的信頼感を基盤として，親像や自己像が調整・再形成されていく場であると考察した。またこの自己や親に対する評価が，食事場面での子どもの自発的な食態度に反映され，子どもの食行動がメッセージを持ったものとして親に伝わり，さらに食環境が変化するという循環になっているものとした。なお，発達段階とともに食環境や自己に対する評価が変化しようとも，このモデルの基本的な構造は変化しない可能性が示唆された。すなわち，食態度は発達段階に関わらず「環境要因としての家庭」と「自己･家族に対する認識」と関連があると考察した。

本研究では，家庭の食事を垣間見る一つのツールとして弁当に焦点をあてたことが特徴であるとも言える。弁当は親子で時空間を共にしておらず，必ずしも家族と同じ食物を分かち合うわけではないにも関わらず，親子関係形成と関連のあることが示された。この結果からは，家庭の食事が，これまで家族の食事の役割として言われてきた「対面することによるコミュニケーションの場」や「文化やマナーの伝承の場」以上の意味合いを持つものであると言えるだろう。すなわち，親子の分離状態においても弁当が間接的なやりとりの場として機能していることが示された。このことから，家庭の食事に求められていることは，ただ単に食事を共に食べる・時空間を共にするだけではなく，子どもが食事を通して親の食事に対する姿勢を垣間見，親や自分に対する評価を構築していくことであるとも考えられる。そのため今後子どもの食のありかたを検討する場合には，子どもの評価・満足度を意識した実現可能な具体案を示すことを提案したい。

今後，縦断的な研究も必要であるが，本研究から得られた結果は，家庭の食事のもつ機能と構造検討の一助となり，今後の食育のありかたに重要な示唆を与えるものであると言えよう。

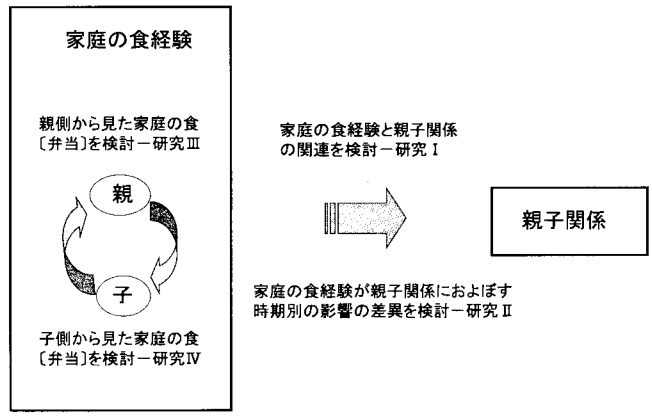

Figure1. 研究概要図

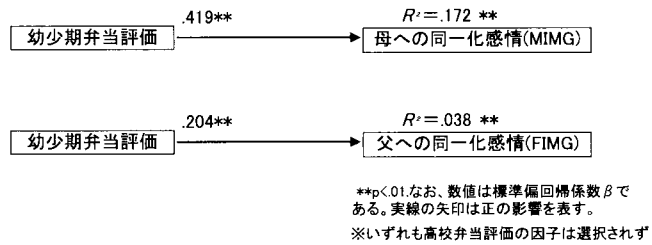

Figure2. これまでの弁当評価が両親への同一化感情へ与える影響

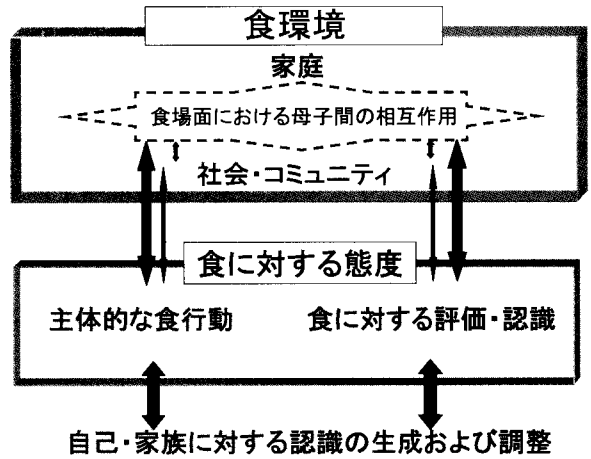

Figure 3. 幼少期の食態度発達プロセスのモデル